

日本語の繰り返し表現と意味の派生

牧原 功（群馬大学）

要 旨

本稿は、日本語のいわゆるトートロジー表現（以後は繰り返し表現と述べる）の中の、「N は N だ」のタイプの、コピュラ文の形式を持つものを取り上げ、その意味がどのように派生するのかを考察したものである。この形式の繰り返し表現の解釈がどのように行われるのかを、語用論的な側面を中心に分析し、関連性理論の立場から意味解釈のメカニズムをとらえることが可能であることを示した。

キーワード： トートロジー、繰り返し表現、コピュラ、関連性

1. 日本語の繰り返し表現について

まず初めに、本稿で繰り返し表現と呼ぶ文について触れておくこととする。様々な言語において、トートロジーと呼ばれる同一語句の繰り返し表現が見られるが、日本語では、その形式はコピュラ型と条件形型に大別することができる。⁽¹⁾

(1) トートロジーって何？

トートロジーはトートロジーだよ。

(2) 2L でも前後左右が長くても 1t 超えても ロードスターはロードスターだった。

(3) 料理ができるって インスタントラーメン？

インスタントラーメンだって料理は料理です。

作例

これらの文は「A は A だ」という文構造を持ち、「トートロジーはトートロジーだ」「ロードスターはロードスターだった」「料理は料理です」のように同一名詞句を繰り返して用いている。これらをコピュラ型と呼ぶ。一方、繰り返し表現には、次のような文も存在する。

(4) 漫画も本といえば本だ。

(5) 行くといったら行く。

(6) 辞めるなら辞めるで早く決断した方がいいよ。

作例

これらは「A といえば A」「A といったら A」「A なら A」という形式で、「A ば B」「A たら B」「A なら B」という条件表現を用いたものである。これらを条件形型と呼ぶこととする。

これまで、日本語でトートロジーと呼ばれる修辞法についての厳密な定義はされてこなかったが、一般的には (1) から (3) のようなタイプを扱うことが多かったように思われる。しかし、実際には (4) から (6) のような形式も多用されている。⁽²⁾ 本稿ではコピュラ型の繰り返し表現を主たる考察対象とする。

2. コピュラ型繰り返し表現について

2.1. 先行研究

日本語の繰り返し表現については、これまでいくつかの研究において言及がなされている。例えば瀬戸（2003）では「あえて同じ表現を繰り返すことによって、無意味に陥ることなく、かえって意味の同一性を積極的に主張し確認する表現法」であると述べ、酒井（2012）では、「語の使用と語の意味は一蓮托生である。使用されるということがすなわち意味をもつということであり、意味をもつのはすなわち使用されるということなのである。「語が意味をもっているおかげで、その語を使うことができる」という発想とは手を切らなければならない。」と述べている。また、筆者も 2016 年の ICJLE バリにおいて「日本語の繰り返し発話は、命題レベルでは情報量はゼロであるが、相手との認識のずれを主張したり、相手の依頼や提案を客観的な事実の提示によって断ったりするという、語用論的機能を有する」（小野、山岡、牧原、李（2016））と主張した。

これらに共通する主張は、繰り返し表現は「同じ語句を繰り返して使用することで意味的には無意味になっている」という点であり、その無意味さが、豊かな表現方法となったり、意味を持たない語を用いても意味は表せるというものである。⁽³⁾

しかし、これらの考え方には 2 つの問題がある。1 つはコピュラ型の繰り返し表現のすべてが、命題レベルで情報量がゼロということはないのではないかということである。もう 1 つは、なぜ無意味さが豊かな表現方法となるのかという点について十分な考察がなされているとは言い難いということである。これらの問題点の前者については、コピュラ型の繰り返し表現には情報量がゼロとは考えられないものもあるということをも、牧原（2017）において主張した。本稿の主張と密接に関わる部分であるため、この点を再度検討しておきたい。

2.2. 繰り返し発話の命題レベルの意味について

牧原（2017）では、以下の 2 つのコピュラ型の繰り返し発話は、異なる命題レベルの意味を有しているという立場を採っている。例を見つつ考えてみたい。

(1) A: トートロジーって何？

B: トートロジーはトートロジーだよ。

(2) 2L でも前後左右が長くても 1t 超えてもロードスターはロードスターだった。

(1) の例における、最初の「トートロジー1」と次に繰り返して使用される「トートロジー2」は全く同じ概念的意味を有しているが、(2) は繰り返されている名詞句が実際には異なる意味を表しているという主張がなされている。

最初に用いられている「ロードスター」を「ロードスター1」、繰り返されるものを「ロードスター2」、とすると、それらが示すものは以下になるだろう。

ロードスター1: 現在の大型化されたロードスター

ロードスター2: 典型的なロードスター、ロードスターという言葉聞いた時に想定する様々な性質を有する車

このことから、「ロードスターはロードスターだった」という文は、「現在の大型化されたロードスター」も「かつてのロードスター」の持つ性質をそのまま受け継いでいた、ということを述べていると解釈できるとした。

このような分析が正当なものであるとすれば、(2) のタイプの文は形式的には同一語句

の繰り返しであるが、表す情報構造から見れば同一の指示対象の繰り返しではないということになる。

以上の点から、繰り返し表現のある種のもの、実際には命題レベルでも意味情報を持っていると考えられる。そして、命題レベルで表す情報の違いによって、意味の差・用法差が生じていると仮定できる。本稿でもこれらの点については同様の立場を採る。

以下では、このような前提の元で、コピュラ型の繰り返し表現の意味がどのように派生するかについて検討する。

3. 関連性理論－認知効果と処理労力－

ここで関連性理論について概説しておく。関連性理論は人類学者スperlペルと言語学者ウィルソンとの共著 Sperber and Wilson (1986) において提案された理論である。これはグライスの協調の原理における関連性の原則を発展させたものであるが、グライスの理論が発話を生成する際に話者が従うルールであるのに対し、関連性理論は聴者側の解釈原理として提示するという点で大きく異なっている。

この点を、山岡・牧原・小野 (2010) の協調の原理の部分を引用しながら具体的に見てみることにしたい。山岡・牧原・小野 (2010) では、協調の原理に合致しない、いわゆるかみ合わない会話例として、以下の例が示されている (例文番号は本稿に合わせ変更)。

(7) A: 明日、佐藤や松崎とサッカーの試合見に行くんだけど、一緒に行かない？

B: 僕はバーベキューが好きだなあ。

(8) A: 今日は暑いですね。

B: 今日は金曜日ですよ。

山岡・牧原・小野 (2010) P.40

これらの例は、「関連性のあることをいうこと」というグライスの関連性の原則に違反するために、適切な会話となっていないとして提示されているものである。

この点について大学の授業で説明すると、それぞれの A と B の文対応関係が不適切とは考えられないのではないか、という独創的な解釈が学生から提案されることがある。例えば、(7) の文では、一見サッカーと全く関係ないことを言っているようであるが、B はサッカーに行くよりもバーベキューに行きたいということを主張して、計画をバーベキューに変更しようと言っているのではないかと、あるいはサッカーの試合が昼に行われる場合、サッカーの試合後にバーベキューをしてはどうかと提案しているのではないかと、という解釈が成り立つというものなどである。また、(8) の文では、金曜日はいつもサークルや職場の飲み会のある日で、A の「今日は暑い」という情報を受けて、B は「今日は飲み会の金曜日ですから、冷たいビールを飲むのが楽しみです。」という意味で返答しているというような意見が出たことがある。そして、このような解釈こそが、実は関連性理論による解釈原理に基づくものである。

関連性は、聴者にとっての影響である「認知効果 (聴者の潜在的な想定の実体への影響力)」と、知覚した刺激を解釈するための「処理労力」の二つの要素によって形成される。認知効果が大きく、処理労力が小さければ、発話の関連性が大きくなる。聴者にとって関連性があるということは、発話の解釈に必要な処理労力に見合うだけの、十分な認知効果を発話が発しているということでもある。

上記の例をもとに考えると、「サッカーの試合に一緒に行かない？」と誘った相手が「うん、行くよ」「その日は特に予定入っていないみたい」「その日はちょっと都合が悪いんだ」といった返答をした場合、質問者が返答として潜在的に想定しているものに近く（＝認知効果が高く）、かつ処理労力が小さいということになる。それに対して、「サッカーの試合一緒に行かない？」という発話に対して「僕はバーベキューの方が好きだなあ」という返答がなされた場合、質問者が返答として想定していない内容であり（＝認知効果が低く）、かつその返答が「サッカーの試合一緒に行かない」という内容とどのように関連しているのかを処理する労力が非常に大きくなるということになる。

本稿で扱う繰り返し表現の意味解釈においては、このような関連性理論の視点を援用することが有用であると考えられる。この点については5節で検討する。

4. コピュラ型繰り返し表現

コピュラ型繰り返し表現とは、「N1はN2だ」（N＝名詞）の形式を持ち、N1とN2が同一名詞句であるというものである。形式的には類似していても、「行くことは行く」「美味しいことは美味しい」等の「VことはV」「AことはA」のようなものは、コピュラ型には含めない。これらは「行くことは行くことだ」「美味しいことは美味しいことだ」のように、「VことはVことだ」「AことはAことだ」という形になった場合のみ、「NはNだ」の形式と同等とみなすものとする。

牧原(2017)では、Googleの検索オプションで「NはNだ」の形式を持つ例を検索し、以下を挙げている（繰り返し表現に該当する部分の下線は筆者の加筆である）。

(9) 電子書籍でも、「本は本」だと思いますが、紙媒体の良さも忘れないでほしいですね。

(10) いくら貴重な本でも、本は本だ。

(11) ウサイン・ボルト選手はスポーツ仲裁裁判所の裁定について「悲しいが、規則は規則だ。決定を尊重しないとイケない。自分に決断の権利はない」と述べた。

これらの例をどのように分類するのが適当であるかについては、コピュラ文についての分析が有効であることから、まずコピュラ文についての先行研究を概観する。

4.1. コピュラ文の分類－西山(2003)－

コピュラ文の体系的な分類を行った西山(2003)によれば「AはBだ」というコピュラ文は、措定文、倒置指定文、倒置同定文、倒置同一性文、定義文の5種類に分けることができる。それぞれを簡潔に整理すると、以下のような特徴を持つ。

コピュラ文の整理 西山(2003)による

意味構造	例文
措定文	あいつは馬鹿だ
倒置指定文	幹事は田中だ
倒置同定文	こいつは山田村長の次男だ
倒置同一性文	ジキル博士はハイド氏だ
定義文	眼科医は目のお医者さんのことだ

西山は名詞述語文の分類の基準として名詞句の指示性という概念を重視しており、それに従うと、措定文、倒置指定文、倒置同定文はそれぞれ次のような名詞句の指示性を持つ。

措定文 【指示的名詞句】は【叙述名詞句（非指示的）】だ。

倒置措定文 【変項名詞句（非指示的）】は【指示的名詞句】だ。

倒置同定文 【指示的名詞句】は【指示的名詞句】だ。

倒置同一性文 【指示的名詞句】は【指示的名詞句】だ。

定義文 【指示的名詞句】は【指示的名詞句】だ。

西山によれば、指示的名詞句とは世界のなかの対象(個体)を指示する(refer to)機能をもつ名詞句であり、叙述名詞句は属性・性質を表すものとされる。「あいつは馬鹿だ」という文は、特定の指示個体を示す名詞句「あいつ」をAとし、属性・性質を表す名詞句「馬鹿」をBとする構造であり、措定文と考えられる。また、変項名詞句は、変項xを含み、xを埋める値を求める名詞句であるとし、「幹事は山田だ」は、誰が幹事かわからないという変項をAとし、変項xを埋める名詞句「田中」がBという構造となっているとする。倒置同定文については、注意すべき点として、名詞句Bは、Aを同定するための特徴記述を満たすものを指示するものであるとし、AはBという特徴記述を満たす「もの/人」とであると述べることで、Aの指示対象を他から識別して認定するとしている。「こいつは山田村長の次男だ」「本書は、涙なしにドイツ語をマスターできるものです。」などがその例である。倒置同一性文は、AとBが実質的に同一の指示対象であるもので、倒置しても表す意味内容に変化が生じないものである。この例として挙げられている「ジギル博士はハイドだ」という文は、倒置して「ハイドはジギル博士だ」という文にすることが可能である。定義文の意味特性としては、Aは定義される項で、Bによってその定義を示すとし、「眼科医は目のお医者さんのことだ」という文がその例となっている。

西山の分類については批判的な論証も行われているが、本稿では西山の枠組みに沿って検討を進めることとする。⁽⁴⁾

4.2. 繰り返し表現とコピュラ文

上述のコピュラ文の分類のうち、繰り返し表現のコピュラ文が該当するのは、結論から言えば、措定文と倒置同一性文であると考えられる。措定文、倒置同一性文について再度確認しておく、それぞれ以下のような性質を持つものであった。

措定文:「AはBだ」で、AはBの性質を持つという意味をあらわす。

「あいつは馬鹿だ」とは言えるが、「*馬鹿があいつだ」とは言えない。

倒置同一性文:「AはBだ」でA=Bといういことを表す。

「ジギル博士はハイドだ」(=「ハイドがジギル博士だ」)

ここで、これまでに挙げた、「N1はN2だ」の形の例文が、どのようなコピュラ文に該当するのかを検討していきたい。

まず、例文(2)(3)のタイプを見てみたい。(2)は「2Lでも前後左右が長くても1t超えてもロードスターはロードスターだった。」というものであったが、ここでは、最初の名詞句N1の「ロードスター」は「エンジンが2Lになり、前後左右が長くなり、1tを超える重量になったロードスター」という特定の指示物を指し示す指示的名詞句であり、その次の名詞句N2の「ロードスター」は、「ロードスターという言葉聞いた時に想定する様々な性質を有する車」という意味を表す叙述名詞句となっている。つまり、この文は措定文

として機能していることになる。(3)の文も「インスタントラーメンだって料理は料理です。」という形で最初の「料理」は「インスタントラーメンという料理」を示し、次の「料理」は「一般的な「料理」の性質を有するもの」を指し、材料をそろえ自分で味付けをして作る料理という、通常想定される料理の性質を有するものなどを表していると考えられる。

これらのことから、措定文の繰り返し表現は、最初の名詞句 N1 は指示的名詞句であり、述語の名詞句 N2 はその意味を示す叙述名詞句となっており、「N2 で聴者にある物事が持つ属性を喚起させて、N1 の対象物もその属性を有することを理解させる」という働きを持つと考えることができる。

それに対して、(1)のようなタイプの文、「トートロジーって何?」「トートロジーはトートロジーだよ」では、二つの「トートロジー」という語を「N1」に該当する部分をトートロジー1、「N2 だ」に該当する部分をトートロジー2 とすると、それぞれの名詞句の表す意味は全く同一である。N=N という意味しか表していない。つまり、指示的名詞句=指示的名詞句となり、それぞれの名詞句は同一性のものであるため、このようなタイプは倒置同一性文として成立していることになる。

これらをまとめると以下ようになる。

I. 措定文型:「N1 は N2 だ」で、N1 は N2 の性質を有していることを表す。

N1 は指示性名詞句であり、N2 は叙述名詞句である。

例) やっぱり、ロードスターはロードスターだ。

インスタントラーメンだって、料理は料理だ。

II. 倒置同定文型:「N1 は N2 だ」で、N1 と N2 は同一の指示物を示す。

N1、N2 ともに指示性名詞句である。

例) トートロジーって何?

トートロジーはトートロジーだよ。

このように、コピュラ型の繰り返し表現には、措定文としての意味構造を持つもの、倒置同一性文としての意味構造を持つものの2つのタイプがあることが確認された。

5. コピュラ型繰り返し表現の表す意味

ここで、コピュラ型繰り返し表現が用いられた場合の、聴者の意味解釈のプロセスについて検討したい。

5.1. 措定文型

措定文型の繰り返し表現が用いられる際は、「～でも」「～だって」「やはり」のような表現と共起することが多い。

(2) 2L でも前後左右が長くても 1t 超えてもロードスターはロードスターだった。

(3) インスタントラーメンだって、料理は料理だ。

の例では、「2L でも前後左右が長くても 1t 超えても」「インスタントラーメンだって」という前置きがなされてから繰り返し表現が用いられている。

これら、繰り返し表現と共起する前置きの表現は、「N1 は N2 だ」の N1 が特定の指示

物を指す指示的名詞句であることを明示する働きをしている。(2)では「ロードスターはロードスターだった」という形を取っているが、実際には N1 の「ロードスター」は「エンジンが 2L になり、前後左右が長くなり、1t を超える重量になったロードスター」という特定の指示物を指示していることになる。(3)でも「料理は料理だ」の N1 の「料理」は「インスタントラーメンという料理」である。

このように、N1 が「特別なロードスター」「特別な料理」であることを示すことによって、N2 が「一般的な（あるいは、これまでの標準的な）ロードスター」「一般的な料理」である可能性を想起させやすくしていると考えられる。例文 (9) (10) も同様の解釈を行うのが妥当であろう。

(9) 電子書籍でも、「本は本」だと思いますが、紙媒体の良さも忘れないでほしいですね。

(10) いくら貴重な本でも、本は本だ。

(9) では、N1 の「本」は「電子書籍」を表し、(10) の「本」は「貴重な本」を表していると考えられる。そして、どちらの文でも N2 の「本」は、「一般的に想起される本としての性質を持つ本」を表している。どちらも N1 は指示性名詞句、N2 は叙述名詞句であり、措定文として成立している。そして、いずれの文においても「電子書籍でも」「いくら貴重な本でも」という前置きの表現と共起して用いられている。他に「学生は学生だ」「国家は国家だ」「小学生は小学生だ」「次郎は次郎だ」という条件検索を用いて Google で繰り返し表現を調べたところ、以下のような用例が検索できた。(それぞれ、1~2 例のみヒットした。なお下線、および波線は著者の加筆である)。

(11) 優秀な学生に恵まれてきたのだが、そうはいっても学生は学生だ

<http://business.nikkeibp.co.jp/article/tech/20111012/223160/>

(12) 弱小国家とはいえ国家は国家だ。

<http://ncode.syosetu.com/n0776do/110/>

(13) 10 年経っても小学生は小学生だな...私と変わらないんだな

<http://onsenjapan.jp/takachi/entry/9464>

(14) 昼間でも同じように身を伏せて隠れてるところが、やっぱり次郎は次郎なんだよなあなんて思います。

<http://www.interq.or.jp/mouse/ikehouse/nekomail/mail/0143.html>

(11) ~ (13) では、「そうはいっても」「弱小国家とはいえ」「10 年経っても」という前置きの表現が用いられ、名詞句 N1 が「優秀な学生」「弱小国家」「(自分が小学生だった頃から) 10 年後の小学生」であることが示されている。(14) は次郎という猫についての文章であるが、この猫は雨をものともせず庭に紙くずを持ち出してサッカーをして遊んでいるということが書かれた後の記述である。このことから、雨でも平気で遊ぶような一面を見せるものの、本来臆病な次郎という猫の本質は消えていないという意味で用いられていることがわかる。(14) の例では「やっぱり」という副詞が、N2 が「本来の性質を持つ次郎」であることを想起させやすくしている。

これらの前置きの成分は措定型の繰り返し表現を用いる際に必須であるということはないが、話者が繰り返し表現を用いる場合、その意図が伝わりにくいことを考慮し、意識

的に、あるいは無意識的に付け加える成分と考えることができそうである。これは認知効果を高め、処理労力を小さくし、呼び出し可能性（accessibility）を高める働きをしていると言える。

5.2. 倒置同定文型

倒置同定文型は、「N1 は N2 だ」の N1 と N2 が完全に同一の指示物を指示している文である。先行研究等で言われる「同じ語句を繰り返して使用することで意味的には無意味になっている」という主張は、このタイプの文についての言及である。

このタイプの文の表す意味は単一ではなく、文脈によっていくつかの解釈可能性がある。倒置同一性文の場合、N1、N2 どちらの名詞も全く指示対象を示すものであるから、その文は命題レベルでは、特に意味を表さないこととなるが、命題レベルで意味のない発話を行うことで、どのような発話の意味（＝語用論的な意味）を表そうとしているのかということが、次に明確にされなければならない。

まず、倒置同一性文と考えられる例をいくつか挙げてみる。

(1) A: トートロジーって何？

B: トートロジーはトートロジーだよ。

(15) A: 課長、やり直してどういことですか？

B: やり直してことはやり直してことだ。⁽⁵⁾

(16) A: あんた、名前は？

B: 俺は俺だ。

ポプテピピック、2018 年 1 月 7 日放送分より

(17) ウサイン・ボルト選手はスポーツ仲裁裁判所の裁定について「悲しいが、規則は規則だ。決定を尊重しないとイケない。自分に決断の権利はない」と述べた。

(18) 人は人、自分は自分だ。

(19) 複数の問題を一緒にしないで「一つ一つ考える」際に重要なのが、「それはそれ、これはこれ」という考え方です。

<http://thinking.shiawasehp.net/0sorekore.html>

(20) うちのかみさんは猫みたいところがあってね。

猫ってどんなですか？

猫は猫だよ。 気まぐれでわがままだけど憎めないんだ。

これらの繰り返し表現がどのような発話意図を持つものと解釈されるかと考えてみると、

(1) (15) (16) では「説明放棄」という発話意図を持つ発話であると捉えられる可能性が高そうである。また、(17) (18) (19) では「規則」や「自分」「それ」「これ」が「固定化したもの、変化しないもの（する必要がない物）」として述べられており、そこから「従わなければならない」という義務や「変化することの必要性の否定」「他のものとの峻別」といった発話意図が推測可能となっている。(20) は説明放棄というよりも、「猫の持つ内包的意味を派生させる」ということ、つまり、「猫」の持つ「気まぐれ」「わがまま」「神秘的」「かわいらしい」といった内包的意味を際立たせていると考えるのが妥当であろう。発話の後で、「気まぐれでわがままだけど憎めないんだ」という補足説明をしていることから、説明放棄とは考えにくい。言うまでもないことであろうが、概念的意味とはある語が表す

実質的な意味を指し、内包的意味とはある語に対して言語使用者が共通の認識として持っている意味、例えば「犬」と聞いてそこから連想される意味を指す。「犬」と言った場合、それが食肉目イヌ科の哺乳類であるという意味は概念的意味であり、「忠実」「賢い」「スパイ」といった意味は内包的な意味となる。内包的意味を際立たせるという解釈は(11)についても可能であり、「規則」という語の持つ内包的意味「厳格」「変えられない」「強い」といったものを強調しているとも言える。

例えばロシア語では「人生は人生だ」という表現があるそうであるが、これは、人生はつらく苦しいものであるという文化や社会の共通の概念を述べることになるという。これも、繰り返し表現を用いることで語の持つ内包的な意味を強調するという働きによるものと考えられる。

このように倒置同定文型の繰り返し表現は命題レベルでは意味を表さないが、以下の2つの語用論的な意味を持つと考えられる。

I. 説明放棄・返答拒否

II. 内包的意味の強調

さらに言えば、Iの返答するつもりがない、説明を放棄するという場合でも、「トートロジーはトートロジーだ」と返答することで、自分で調べなさいという別の働きかけを表そうとする場合もあるし、「やり直してことはやり直してことだ」で、どこがダメなのかもわからないのかという叱責であるとか、上司の指示に従うのが部下の務めだと暗に指摘しているという場合もあるだろう。「俺は俺だ」という文は、名前なんか聞いて何の意味があるのだ、という意思表示とも取れる。この点では、「トートロジーって何?」「わからない」であるとか、「あんた名前は?」「教えない」といったやり取りよりも、非常に多くの解釈可能性を残す表現となっている。返答拒否、説明放棄といった内容を直に伝えるよりも、より多くの情報を聴者に与える表現になっていると言ってもよい。

つまり、倒置同定文型の繰り返し表現は、認知効果の低い表現を用いることによって、処理労力の負荷を増やし、聴者に発話意図を文脈に応じてさまざまに解釈させるという働きを持たせていると言える。言い方を変えれば、聴者に解釈の努力を求めることを意図して、意識的に不明確な述べ方をされる表現であるとも言えそうである。

6. 今後の課題

本稿では、日本語の繰り返し表現の中でも、「NはNだ」というコピュラ型の表現に焦点を当て、その命題レベルの意味から分類を行い、それぞれのタイプにおける意味解釈がどのように行われるのかについて語用論的に考察を行った。しかし、「テストはテストでも、入学試験の緊張は違うよ」のような「NはNでも」のような用法は検討の対象外としている。また、条件形型の繰り返し表現は「美味しいといえば美味しい」のように、コピュラ型の措定文の意味に類似した意味を表す場合が多いが、「田中さんも田中さんだ」のような表現をどのように位置づけるかといった点も今後の課題である。

7. 注

(1) 牧原(2017)を参照されたい。

(2) 「田中さんも田中さんだ」という「AもBだ」型については、コピュラ型ではないが、

条件形型に分類可能かどうか検討が必要である。

(3) 野呂 (2016) では広汎な繰り返し表現の形式を考察対象として分析しているが、コンピュータ型についての言及はほとんど見られない。

(4) 東郷 (2005)、今田 (2008) などを参照されたい。

(5) この文は、「やり直しということ」を名詞句としたコンピュータ型である。

8. 参考文献

- 小野正樹・山岡政紀・牧原功・李奇楠 (2016) 「配慮表現から見た日本語の同一語句の繰り返し発話について」 日本語教育世界大会 2016 ポスター発表
- 酒井智宏 (2010) 『トートロジーの意味を構築する: 「意味」のない日常言語の意味論』 くろしお出版
- 瀬戸賢一 (2003) 「トートロジー (tautology)」 『応用言語学事典』 研究社、307
- 陳訪澤・張秀娟 (2014) 「トートロジー文とコンピュータ文との関わりについてーその意味構造に注目してー」 『日本学刊』 17、香港日本語教育研究会、pp. 12-29
- 東郷雄二 (2005) 『指示と照応に関する語用論的研究報告書』 科研費研究報告書
- 西山佑司 (1990) 「コンピュータ文における名詞句の解釈をめぐる」 『文法と意味の間: 国広哲弥教授還暦退官記念論文集』 くろしお出版、pp. 133-148
- (2003) 『日本語名詞句の意味論と語用論』 ひつじ書房
- 野呂健一 (2016) 『現代日本語の反復構文』 くろしお出版
- 牧原功 (2017) 「日本語の繰り返し表現についてー繰り返し表現の類型化と意味の派生のメカニズムを考えるー」 『日本語コミュニケーション論集』 第 6 号、日本語コミュニケーション研究会、pp. 15-24
- 山岡政紀・牧原功・小野正樹 (2010) 『コミュニケーションと配慮表現』 明治書院
- Sperber, D. and D. Wilson (1986) *Relevance: Communication and Cognition*, Blackwell.
- Sperber, D. and D. Wilson (1995) *Relevance: Communication and Cognition*, Second Edition, Blackwell. (邦訳: 内田聖二他訳 (2000) 『関連性理論』 第 2 版 研究社出版)

(牧原功、群馬大学学術研究院准教授、makihara@gunma-u.ac.jp)